

1 作 物

項 目	作 業 内 容																				
(1) 普通期水 稲の管理・ 収穫	(今月の作業のポイント) ○普通期水稻の管理・収穫 ○次作の水田雑草防除 ○大豆の管理 ○麦の種子とほ場の準備																				
	ア 水管理・落水 登熟期間は間断かん水により土壌を湿潤気味に管理する。落水時期が早いと玄米の粒厚が薄くなり、品質・食味低下を招くため、収穫5～7日前の落水を基準とし、天候や水田の状況を見て判断する。また落水日までは水を張っておき、一気に落水する。																				
	イ 収穫適期 本年の普通期水稻の出穂期は昨年並み～やや遅く、登熟期間も昨年並みの高温で推移しているため、成熟期は昨年並み～やや遅くなると予想される。向こう1か月の平均気温は平年より高い見込みであり（9月18日高松气象台発表の1か月予報）、成熟期が早まる場合もあることから、収穫にあたっては下表を参考にほ場観察を行い、適期収穫に努める。																				
	ひめの凜は刈遅れを防ぐため、黄変率85%に達したら刈り始める。ヒノヒカリは、刈り遅れると茶米が混ざり品質が低下しやすいので注意する。																				
	表 水稻の収穫適期の基準																				
	<table><tr><td></td><td>ひめの凜</td><td>ヒノヒカリ</td><td>にこまる</td><td>松山三井</td></tr><tr><td>出穂後日数(日)</td><td>37～43</td><td>40～46</td><td>42～48</td><td>50～57</td></tr><tr><td>最長稈黄変率(%)</td><td>85</td><td>85</td><td>90</td><td>90</td></tr><tr><td>積算温度(℃)</td><td>900～1,000</td><td>900～1,050</td><td>1,000～1,150</td><td>1,050～1,200</td></tr></table>		ひめの凜	ヒノヒカリ	にこまる	松山三井	出穂後日数(日)	37～43	40～46	42～48	50～57	最長稈黄変率(%)	85	85	90	90	積算温度(℃)	900～1,000	900～1,050	1,000～1,150	1,050～1,200
		ひめの凜	ヒノヒカリ	にこまる	松山三井																
	出穂後日数(日)	37～43	40～46	42～48	50～57																
	最長稈黄変率(%)	85	85	90	90																
	積算温度(℃)	900～1,000	900～1,050	1,000～1,150	1,050～1,200																
ウ 乾燥・調製 収穫した籾は、長時間堆積したまま放置すると品質が低下するため、収穫後は速やかに乾燥を行う。食味低下を防ぐため、乾燥温度はできるだけ低温に設定し、乾減率は毎時0.8%程度とする。高水分籾（25%以上）は水分ムラが多いので、一度35℃以下で乾燥し、水分を20%に下げた後、再び通常の熱風温度で乾燥する。玄米の仕上がり水分は14.5%を目標とし、過乾燥（14%以下）や高水分（15%以上）とならないよう注意する。																					

項 目	作 業 内 容
(2) 次作の水田 雑草防除	粃摺りでは、ゴムロール等の消耗部品の交換や調整を事前に行い、玄米の肌ずれや胴割れ米の発生、粃混入を防止する。 調製では、必ずライスグレーダーを使用し、ふるい目 1.85 mm 以上で入念に選別作業を行い、整粒割合 80%以上を目標に仕上げる。 近年は除草剤だけに頼った雑草防除が増えており、除草剤が効きにくい難防除雑草が増加している。ノビエ等の一年生雑草は、放置すると多量の種子を作り、次年度の多発生につながるの、なるべく早い時期に抜き取る。ミズガヤツリ、クログワイ等の多年生雑草は、地下茎や塊茎で繁殖するため、水稻収穫後、非選択性茎葉処理剤のスポット散布や、反転耕で土中の塊茎を露出させ、乾燥と寒気で枯死させる。また、地域の広範囲で特定の雑草が残る場合は、除草剤の変更を検討する。  写真1 ノビエ  写真2 クログワイの塊茎
(3) 大豆の管理	大豆は子実肥大期～成熟期となる。この時期にはほ場が長時間湛水すると、根痛みによる登熟不良を引き起こすほか、倒伏した莢が浸水すると腐敗粒増加の要因となるため、収穫期まで明渠の補修や排水口との接続等により停滞水の排水に努める。
(4) 麦の種子と ほ場の準備	ア 種子の準備 麦は自然交雑が起こりやすく、自家採種を続けると品種特性の劣化や混種、変種が起こるため、2～3年に1回は種子更新を行う。 また、種子伝染性病害（裸黒穂病、斑葉病など）を防除するため、種子消毒は必ず行う。薬剤はベンレートTコート（乾燥種子重量の 0.5%粉衣処理）などを用いる。多量に種子消毒をする場合は、種子消毒機を使うと便利であるため、JAによる機械の貸出しを活用する。

項 目	作 業 内 容
	 写真3 裸黒穂病 イ は種前のほ場の準備 麦のは種期の多雨は出芽不良や減収を招くため、湿害対策は万全に行う。特に水稻の後に麦を栽培するほ場では、降雨後速やかに排水し、適期のは種が可能となるほ場を準備する必要がある。このため、水稻収穫後はできるだけ速やかに、額縁明きょ（写真4）や弾丸暗きょ（写真5）を施工し、ほ場の乾燥に努める。チゼルプラウ耕（写真6）を併用すると土壌が乾きやすくなり、は種時の碎土性が向上する。  写真4 額縁明きょの施工  写真5 弾丸暗きょの施工  写真6 チゼルプラウ耕

（作成 農林水産研究所）